



「佐々木さんを支援する会」会報

# ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3 / TEL 045-774-9861洋光台  
バプテスト教会内(蛭川明男牧師) / 世話人代表 金子 敬  
事務局長 吉高 叶(栗ヶ沢バプテスト教会TEL 047-341-9459)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

## 巻頭言

加藤 誠

かとう まこと

「支える会」呼びかけ人  
日本バプテスト連盟常務理事

私のパソコン横には一枚のルワンダ少年の写真が立てかけてある。昨年4月にルワンダを訪ねた際、礼拝堂の片隅で「僕の写真も一枚！」と身振り手振りで語りかけてきた少年のものである。8歳から9歳だろうか。いたずら盛りの年齢の子どものらしい、愛嬌のある目がカメラのレンズを通してこちらを見つめている。毎朝この少年の眼差しを受けて、私の一日は始まる。

佐々木氏がスタッフの一員として働くREACH総主事のカリサ牧師(聖公会)は私と同世代である。ツチ族の彼ら家族は1960年代にルワンダから追われ、隣国ブルンジで難民生活を余儀なくされた。「就職のためには学校で良い成績を取る必要があった。しかし良い成績を取ると『ルワンダ人が!』と嫌がらせを受けた」という。聖公会牧師を志して英国に留学中、最終学年で大虐殺直後の祖国を訪問し大きな衝撃を受けたカリサ牧師は「癒しと和解」のために献身する決意を与えられREACHを立ち上げた。

「どこの国が一番住みやすい？」と尋ねた私に、「もちろん、ルワンダだ

よ！」と間髪入れず答えたカリサ師。そのときの優しく笑いながらも深い決意を秘めた眼差しが心に残っている。

かつてルワンダを植民地支配した宗主国の民族分断政策が創り出したフツ族とツチ族の間の根深い対立。その歴史に翻弄され安住の地を奪われ続けてきたルワンダの人々。長い年月を通して積み重ねられた怒りと悲しみの連鎖は、そう簡単に断ち切られ、癒されるものではない。十字架の主は彼らに負わされた重荷を自らの痛みとして引き受け、執り成し祈り、復活の希望において彼らを支え、和解と癒しのための働き人を今日も起こし続けておられる。

REACHとの宣教協約締結の際、カリサ師は語った。「違う者同士が共に働くことは容易ではない。互いに相手に聴き、理解する努力が繰り返し求められる。が、この働きを始められたキリストに希望をおいて共に歩みたい」。

主が今日も働き続けておられるゆえに、私たちも今日一日の祈りを重ねていきたい。



## 佐々木和之

ささきかずゆき

## 「恵み」としての赦し

赦しが「恵み」として神から与えられることによるのみ、  
私たちは赦すことのできるものになるのです。

### ■ムラーホ！（こんにちは！）

残暑厳しい時期ですね。皆さんいかがお過ごしでしょうか？こちらは、日差しはさすがに強いです、日中の気温が摂氏25度前後、湿度も35%程度ですので、日本よりずっと過ごしやすい気候です。私がルワンダに来てもうすぐ十一月になります。前号でお伝えしたように、労働許可や滞在ビザの取得、税関からの家財道具の取り出し、そして、活動車両の購入のために随分苦労しましたが、6月までには全ての手続きを完了し、本格的にREACHの活動に打ち込むことができるようになりました。これまで皆さんから頂いたお祈りとご支援をありがとうございます。これから少しずつ活動が軌道に乗ってくると思います。どうか今後ともお祈りとご支援をよろしくお願い申し上げます。

### ■REACHの活動戦略の策定

私が所属するREACHは、今年の秋に創立十周年を迎えます。現在、私を除き職員が4名、年予算が700万円程度の小さな現地NGOですが、組織の更なる飛躍を目指して活動戦略を練り直そうということになりました。そして、REACHの代表カリサ牧師からの要請で、今後5年間の活動戦略策定プロセスの先導役を私が務めていくことになりました。と言っても、私がルワンダ人職員のために計画を立ててあげるわけではありません。私の役割は、活動戦略策定の方法とプロセスについて彼・彼女達に助言しながら、彼・彼女達自身が、将来のビジョンを明確にし、それを実現していくために必要な具体的な課題や方策について考察するプロセスを助

けるのです。

職員と理事の代表者からなる「戦略策定チーム」に対するオリエンテーション、REACHの活動に関する地域住民の意見調査、海外の支援団体に対する意見調査などの準備の後に、5月8日から10日の3日間、「戦略策定チーム」計5人と一緒に泊りがけでワークショップを実施しました。ワークショップはだいたい以下のような流れで進みました。

まず第一に、REACHの創設からの歩みを振り返り、これまで実践の中で学んだ事柄を整理しました。第二に、REACHの使命（ミッション）とビジョンについて話し合いました。REACHはこれまで「これらすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。」（聖書 第二コリント5章18節）をミッション・ステートメントとしてきましたが、このワークショップでは、この聖書の言葉に立ち続けることの決意を新たにしつつ、団体の目的、活動、基本理念をより明確にうたったステートメントにしよう話し合い、具体例を出し合いました。第三は、SWOT分析という手法を用い、「REACHの長所」（Strengths）や「短所」（Weaknesses）について、また、今後組織の使命を全うしていくために、どのような「機会」（Opportunities）を利用していくことが出来るのか、さらには、組織の使命達成を阻む要因である「脅威」（Threats）にはどのようなものがあるのかなど、活動戦略を策定する上で考慮しなくてはならない様々な要因に

ついて話し合いました。

このSWOT分析を進める上で、活動地域の住民や海外の支援団体への意識調査の結果を参考にしたことは言うまでもありません。次に第四として、SWOT分析の結果を踏まえ、今後5年間のREACHにとっての最重要課題は何であるのか、そして、それらに取り組み上での主要な戦略について話し合いました。

このワークショップの結果、1) 現在REACHが実施している「癒しと和解のセミナー」などの活動を、将来的には活動地域の教会や住民たち自身が担っていくことが出来るように訓練していくこと、2) 大虐殺の加害者の地域社会への再編入 (reintegration) や子どもたちに対する平和・和解教育など、地域住民への意識調査の結果浮かび上がった新たなニーズに応えるための活動を構築していくこと、3) 「アフリカ大湖地域のための平和構築研修センター」構想を具体化していくこと、4) REACHの活動を祈りと資金援助で支えるサポート体制を強化すること、5) 今後5年間の組織の規模拡大に備え、活動計画・モニタリング・評価、会計管理、人材管理等に関する管理システムの整備と職員の訓練に努めること、等の課題を含む八つの課題に取り組んでいくことになりました。

ワークショップでは、連日朝8時から夜8時頃まで熱心な討議が繰り返されました。参加者一同疲れもあったと思うのですが、三日間集中力が途切れることなく、議長役を務めた私自身、彼らの熱意にとっても励まされました。6月、7月にも、まる一日がかりの会合を三回持ち、今後5年間REACHが展開していく諸活動それぞれの目標と、それらの活動を効果的に実施していくために必要な、組織運営・管理に関する諸目標を定めることが出来ました。

#### ■癒しと和解セミナー

前号で、11月から12月にかけて、東部

県 (Eastern Province) の3地区において「癒しと和解セミナー」、3回シリーズの第1回目を実施したことをお伝えしました。その時と同じ参加者を招き、5月中旬から6月上旬にかけ、第二回目のセミナーを同じ3地区で実施しました。

ブゲセラ郡のルフハ村とニヤマタ村でそれぞれ行なわれたセミナーには、地域のキリスト教各派から派遣された牧師、司祭、信徒リーダー、イスラム教の代表者、地方政府の代表者が集い、参加者はそれぞれ52名 (男性45名、女性7名) と48名 (男性42名、女性6名) でした。一方、東部県の県庁所在地ルワマガナで実施されたセミナーには、地域のキリスト教各派に連なる62名の女性 (特にジェノサイドの生存者である女性達とジェノサイドの加害者を家族に持つ女性達) が対象でした。既にお伝えしたように、前回のセミナーでは、ルワンダの人々の間に分断が深まり暴力紛争が引き起こされるに至った歴史的背景と、ルワンダ紛争においてキリスト教会が果たした役割について省察することに焦点が置かれていました。一方、今回のセミナーは、ア) 紛争解決の理論と方法、イ) トラウマからの癒し、ウ) 赦しを請うこと・赦されること・赦すこと、エ) 暴力によるトラウマに苦しむ人々やHIV/AIDS感染者に対するケアという4つのテーマから構成されていました。



(自らの体験を語るセミナー参加者)

セミナーの雰囲気や様子については、私のお便りの後に、妻の恵がセミナー参加体験を書いていますので、詳しくはこちらをご覧ください。

ここでは、私が数回にわたりセミナーに参加して感じていることをいくつかお伝えしたいと思います。その一つは、セミナーが参加者にとって、心の内に閉じ込めていた様々な思いを表現する場になっているということです。自分の思いや経験を他の参加者に聴いてもらうこと、また、立場は違っても自分と同じように苦しみを負ってきた他の参加者の話を聴くことによって、彼女達の気持ちが少しずつほぐれ、連帯感が生まれてきます。そして、主イエスが、彼女達の悲しみや痛みを受けとめて下さること、共に歩いてくださることを、聖書の学びや証し（体験の分かち合い）を通して共に確認していきます。そのようなプロセスの中で、憎しみを乗り越え、赦しのうちに生きていこうという決心が与えられるのです。

これまでのセミナーを観察させてもらって、いくつか気になることもあります。それは、人間の他者への赦しが、神から赦されたキリスト者の「義務」として語られる傾向があることです。この傾向は、ルワンダの教会に一般的に見られるものだと思います。「我々クリスチャンは、神様の赦しを知っているのだから、他者をも赦さなければならない。それが出来ないとしたら、ノンクリスチャンと同じではないか」、といった発言をセミナーに参加する牧師や信徒たちから度々耳にします。しかし、このような「義務としての赦し」の強調は、「どうしても赦せない」と思っている人々を裁くことに繋がっていきます。そして、既に心と身体に深い傷を負っている彼・彼女らを、更に傷つけ苦しめることになるのです。このような問題を目にし、私は「恵みとしての赦し」をREACHのセミナーで更に強

調していかなければならないと思っています。罪ある私たち人間が、神によって赦されたことも神様の「恵み」ですが、その赦された私たちが赦す者へと変えられていくことも「恵み」です。赦しが「恵み」として神から与えられることによってのみ、私たちが赦すことのできるものになるからです。そして、私たちが何者かに傷つけられ、その加害者を赦すことが出来るようになったとき、その加害者は、被害者である私たちを通して神の「恵み」としての赦しを受け取るようになるのではないのでしょうか。REACHのスタッフたちと共に学び合いながら、赦しをどのように捉え、そして伝えていくのかを更に深く考えていかなければならないと思われています。



(共に祈るセミナー参加者)

## 主にある希望

ささき めぐみ  
佐々木 恵

彼女たちは、主が「わたしにゆだねられているもの」を知っており、主が「かの日まで守ってください」と確信しているのでしょう。

6月のはじめ、和之の働くREACHが主催する「和解セミナー」に、初めて参加させてもらいました。場所は、キガリから車で45分ほど東に走ったところにある、東部県の県庁所在地ルワマガナ。女性を対象としたセミナーで、3日あるプログラムの最終日でした。セミナーの後半には、参加者による体験の分かち合いがあったのですが、ジェノサイドの体験を実際に聞くのは、今年の4月、アマホロスタジアムであった追悼記念集会のとき以来でした。しかし今回は、本当に小さいセミナーの中で、顔と顔を合わせて聞くという、前回とは全く違った体験で、一人一人の体験の重さに圧倒されました。しかしそこで経験したことは、まさに「主にある希望」の体験でした。

ジェノサイドの暗い・重い・辛い経験を持つ彼女らは、今もその苦しみの中で生活しています。自分の中にある憎しみ・人から受ける屈辱・家族の抱える苦しみ悩みは、決して過去のことでなく、今現在の彼女らの苦しみ悩みなのです。しかしその中であって主イエス・キリストにある癒しを経験し、自ら新しい一歩を歩み出している人、踏み出す決心をした人たちが与えられているのです。ある老年に差し掛かった女性は、自分の子供たちを、雇っていた使用人に殺されるという経験を持っています。しかし彼女は、その元使用人たちを刑務所に見舞い、彼らが出所した後も援助を続けているのです。また、ある人は、自分の家族を殺した人が罪の自白をして出所してきた後、その人との和解を求めて自分から接触を試みま

した。何度も相手から避けられつつも、諦めることなく接触を続け、とうとうその相手に「私はあなたを赦しているよ。」と告げて、抱き合ったというのです。彼女たちにとって、「主が私の罪を赦してくださった。」「主が共にいてくださる。」ということ、生きた力となっているのです。そのことを彼女らは確信しているのです。彼女たちがまず、主の愛によって変えられているのです。彼女らの証しを聞いて、ひとりのまだ若い母親が立ち上がって証しをはじめました。「私は今まで自分のおじ家族を殺した人たちをどうしても赦せないと思い続けていた。でも、私は今日その人たちを赦します。」と語ったのです。また、新しい「主にある癒し」の道のりを歩みはじめる決心をした人がこの日与えられたのです。



(家族を大虐殺で奪われながら、刑務所に加害者のための慰問を続けた女性と)

「主にある希望」がここにある！と、私はこのとき感動で胸がいっぱいになり

ました。主は、今日ここで彼女らに語りかけ、働きかけてくださっていると知ったからです。テモテへの手紙二1章12節でパウロは言います。「わたしは自分が信頼している方を知っており、わたしにゆだねられているものを、その方がかの日まで守ることがおできになると確信しているからです。」彼女たちもまさにこのパウロのように、主が「わたしにゆだねられているもの」を知っており、彼女たちは主が「かの日まで守ってくださる」と確信しているのでしょうか。自分の家族を殺した人を見舞う、助ける、「あなたを赦しています」と言って抱き合うという、人間の力ではできそうもない「わたしにゆだねられた」行為を、この女性たちが始めている。まず、この人たちが変えられているのです。

和解への道を歩み始めた彼女たちの道のりは、きっと、困難の多い険しい道のりだと思います。しかし、主が共にいてくださいます。また、共に歩む友の存在、このセミナーに集う友人たちの支えは大きいでしょう。私は、彼女たちから「主にある希望」を教えることができました。感謝です。彼女たちは、セミナーの途中でも、最後まで、主への讃美の歌を体中で喜びたたえながら歌っていました。太鼓を叩き、シンバルを鳴らし、それに合わせて踊り、歌い・・・私も彼女たちに合わせて手を叩きました。でも本当は手を叩きながら、彼女らの踊りの輪に加わりたいと思っていたのです。でも結局、一歩踏み出す勇気がなく、私はいすに座ったままでした。あの時、彼女たちと一緒に輪の中に加わり踊ればよかったと、今とても残念です。

### ●「クッキーとビスケット」

6月25日に、知り合いから子猫を一匹もらい受けました。黒とグレーの縞々トラ猫です。名前はビスケット。愛犬クッキーと仲良くしてもらおうと、相性のいい名前を選んだのです。ビスケットが

我が家に来て2週間ほどたちますが、クッキーとの仲も落ち着いてきて、すっかり我が家の一員になりました。クッキーはビスケットが来てからというもの、興味はすべて彼女。朝、テラスにいるクッキーを部屋に入ると、まず私の前に座り込んで、体をなでてもらうのが日課だったのですが、今ではビスケットまっしぐら！彼女を見つけるまでは、部屋の中を必死に探し回ります。見つけると、舐めたりかんだり・・・ビスケットにとってはいい迷惑ですが、彼女も機嫌のいいときには、クッキーに舐められるままにしています。ところで、日本の猫は、「プワツ！」と口から息を噴射して威嚇するのでしょうか？「シャー、シャー」言って威嚇するのは知っていますが、私は今までこのような猫を見たことがありませんでした。ところがビスケットがこの威嚇方法を用いるのです。ルワンダ猫の特徴なのでしょうか？最初、その音を聞いたとき、誰がだした音なのか分かりませんでした。子猫とその音を結びつけることができなかつたのです。そのくらいすごい音なのです。この「プワツ！攻撃」にあうと、さすがのクッキーも逃げ出してしまいます。きっと子猫のビスケットが自分の体の二十倍はあるクッキーに挑むには、これくらいの迫力が必要なのでしょう。このごろでは、この「プワツ！」を聞くことも少なくなり、クッキーとビスケットの仲も穏やかな関係になってきたところ です。



(クッキーとビスケット)

## ● サッカーボールがきっかけで・・・

こちらに来てからというもの、息子たちが庭でサッカーボールを蹴ってよく遊ぶのですが、もうボールを2個もだめにしました。そして、とうとう3個目のボールがついこの間から行方不明になっているのです。和之は、ボールを大切に使わない息子たちに対して、「もうボールは買ってやらないから、お前たちも、こっちの子供たちみたいにビニールを紐でまとめてボールを作って、それで遊びなさい。」と、怒っていました。こちらの子供たちもサッカーは大好きです。でも、もちろん、サッカーボールを買ってもらえる子供たちはほんの一人握りの子供たち。すぐ隣の教会の集會場で遊んでいる子供たちも、自作のボールでサッカーを楽しんでいるのです。

ある日のこと、長男仁(12歳)の姿が家のどこにも見当たらないと思っていたら、ビニールを紐でまとめたボールを嬉しそうに抱えて持ってきました。隣の教会の集會場で遊んでいた男の子にボールを作ってもらったと言うのです。「あの子すごいんだよ。すごく上手に紐でまとめながら作るんだよ！」仁は、作ってもらったボールを自慢げに見せてくれました。そのボールは、どこかで手に入れたらしい梱包用の空気の入ったビニールを荷造り用の紐できれいに編んでまとめたのです。

私は、庭の隅に転がっている壊れて空気の抜けたサッカーボールを見ながら、またその一方で近所の子供たちが自分たちで作ったビニール袋のサッカーボールで遊ぶのを見ながら、私たちと隣に住む方々との生活の違いということ考えさせられていました。もちろん、サッカーボールだけではありません。着るものも住む家も本当に大きな差があるのです。そんな中で生活しながら、サッカーボールが壊れたりなくなったりするとすぐにも買ってもらえるうちの子どもたちにも、自分の周りに住む人たちの生活についてももっと考えて欲しいと思っていたのです。

次の日も、仁はまた隣の集會場に行って、同じ子に今度はボールの作り方を教えてもらって来ました。今日は名前もちゃんと聞いてきました。「ママ、ヒルグワに、お礼にあげるいい服ないかなあ？」さっそく数枚見繕って、着ていない服を差し上げました。翌日、まだそれらの服を着るには小さいヒルグワが、服と一緒にあげた帽子をかぶって隣の敷地から手を振ってくれました。私は長い間、何かきっかけがあれば、近くに住む方々に「何かしてあげたい」という風に思っていたのですが、仁は、「相手に教えてもらう」ということできっかけを作ってくれました。これからすこしずつ、仁が作ってくれたヒルグワとの関係が広がって、そのご家族と、そしてまたそのご家族を通して近くに住む方々との関係が広がっていったらなあ・・・と希望を持っているところです。

## ≪佐々木ファミリー祈りのリクエスト≫

- ・ 家族の健康が続けて守られるように
- ・ REACHの活動一つ一つの上に、主の豊かな導きがあるように
- ・ 和之と恵のニャルワンダ語上達のために
- ・ 家族の一人ひとりに現地で良い友人が与えられるように
- ・ 子供たちの学校と家庭(日本語)での学びが順調に進むように
- ・ 恵に家庭の外においても適切な働きの場が与えられるように



(家族5人とクッキー&amp;ビスケット)

## 感謝をもって会計報告をいたします！

2005年度 会計報告		単位 円	
収入の部		支出の部	
前年度繰り越し金	2,229,153	活動日 ※3	5,112,461
支援金 ※1	11,756,622	広報費	83,560
謝礼 ※2	334,368	事務費	50,952
		次年度繰越金※4	9,073,170
合計	14,320,143	合計	14,320,143

●世話人会は会計監査として梶井義郎氏（日本バプテスト連盟平塚教会牧師）を選任し、2006年5月22日に会計監査を受けました。

●備考

※1 「支援金」は、定期支援、自由支援、献金の合計です。（尚、この中には2006年度、2007年度分の前納分の支援金も含まれています。）

※2 佐々木さんが、2005年5～6月にかけて帰国した際、国内での講演の謝礼

※3 佐々木さんご家族の生活費、帰国時の活動費、支援会活動費等

※4 次年度繰越金9,073,170円は全額、2006年度スタート時に「積立金」と致しました。

### '06年4月以降に新たに支援をくださった方々です。

井林敏子、小笠原クニ子、笠原正俊、学校法人・関東学院理事長 内藤幸穂、  
柴田良行、島田勝彦・百合子、西南学院バプテスト教会姉妹会 瀬戸口早苗、  
曾根公興・真紀子、富里教会女性会、中井重雄・典子、  
日本バプテスト前橋教会、野村宏子、松坂征豊・登茂子、三鷹バプテスト  
教会、南 国子、毛利秀子、横須賀長沢キリスト教会みぎわ会、横浜南キリ  
スト教会、吉田フミ子、 以上（敬称略・あいうおお順）

心より感謝いたします。

**郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会**

事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。なお、「郵便自動引き落とし」をご利用いただけます。ご連絡いただければ、所定の申込用紙を送らせていただきます。

洋光台教会・蛭川までご連絡ください。（電話045-774-9861）